



(写真：ゴルゴタの丘 聖墳墓教会)



阿佐ヶ谷教会

信友会 会報

1 月例会報告 (2018 年 1 月 28 日開催)

2 月総会報告 (2018 年 2 月 25 日開催)

聖書研究

旧約聖書が指し示す十字架と復活

2018 年もはや 2 か月が過ぎました。ピョンチャン(平昌)の冬季オリンピックも終わり、ようやく日常の生活リズムに戻りました。また今年はことのほか寒さも厳しく、北陸地方をはじめとする日本海側は大雪にみまわれ、生活に大きな支障が出ています。また全国的にはインフルエンザが蔓延しましたが、それを乗り越えて春を迎えることができましたでしょうか。

4 月からは古屋治雄先生と江原有輝子先生の教職二人体制となり、長老や部会の役割も大きく変わろうとしています。来年 70 周年を迎える信友会活動も新体制のもと、活動の活性化を目指して進みます。(Y.O)

「旧約聖書が指し示す十字架と復活」

古屋治雄牧師

信友会 11 月例会では、「旧約聖書が指し示すクリスマス」のお話をいたしました。

今回は引き続いて、新約聖書がイエス・キリストの十字架と復活について旧約聖書がいかに預言しているかを調べます。このイエス・キリストの十字架と復活の預言は、クリスマスのように、「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む・・・」、救世主の誕生預言のようにはすぐには見つからないのです。

死者の復活の聖書箇所

まず、旧約の中で「死者の復活」に関連する聖句を調べると、**ダニエル書 12 章 1～2 節**があります。「その時、大天使長

ミカエルが立つ。彼はお前の民の子らを守護する。その時まで、苦難が続く／国が始まって以来、かつてなかったほどの苦難が。しかし、その時には救われるであろう／おまえの民、あの書に記された人々は。多くの者が地の塵の中の眠りから目覚める。ある者は永遠の生命に入り／ある者は永久に続く恥と憎悪の的となる」。ここで、ある者は永遠の命に入ると言っており、復活の預言の箇所と言えます。

イザヤ書 26 章 19 節には、「あなたの死者が命を得／わたしのしかばねが立ち上がりますように。塵の中に住まう者よ、目を覚ませ、喜び歌え。あなたの送られる露は光の露。あなたは死霊の地にそれを降らせられます」。ここでも死者が命を得ると言っています。



ヨブ記 19 章25～27 節では、「わたしは知っている／わたしを贖う方は生きておられ／ついには塵の上に立たれるであろう。この皮膚が損なわれようとも／この身をもって／わたしは神を仰ぎ見るであろう」。この部分は葬儀の式文に使われることがあり、肉体の滅びがある中で神を仰ぎ見ることができるので、復活の箇所と言っても良いでしょう。

詩編 16 章 10 節では、「あなたはわたしの魂を陰府に渡すことなく／あなたの慈しみに生きる者に墓穴を見させず命の道を教えてください。私は御顔を仰いで満ちたり、喜び祝い／右の御手から永遠の喜びをいただきます」。これも復活の箇所と言えます。



復活を否定する聖書箇所

一方、旧約聖書には復活を否定するような聖書箇所もあるのです。

イザヤ書 26 章 14 節では、「死者が再び生きることはなく／死霊が再び立ち上がることはありません。それゆえ、あなたは逆らう者を罰し、滅ぼし／彼らの記憶を全て無に帰されました」。死者や死霊は再び立たずと、激しい否定の言葉になっています。

詩編 88 章 11～12 節では、「あなたが死者に対して驚くべき御業をなさったり／死霊が起き上がって／あなたに／感謝したりすることがあるでしょうか。墓の中であなたの慈しみが／滅びの国であなたのまことが／語られたりするでしょうか。闇の中で驚くべき御業が／忘却の地で恵みの御業が／告げ知らされたりするでしょうか」。ここでは死を超える力を否定し、現実に即した言い方で死者の復活を否定しています。

創世記のアブラハム、イサクやヤコブなど族長たちは、神に従ういろいろな経験と地上の歩みを全うして、死によって滅びの世界に陥るのではなく、「神によって先祖の列に加えられる」と考えていました。

福音書での旧約聖書の引用

新約聖書における十字架と復活について旧約聖書につながる箇所を探します。

まず福音書における十字架と復活に関する記事は、それぞれ福音書の最後の部分に書かれます。マタイ福音書は 28 章 9 節以下、ルカ福音書は 24 章 27 節以下、ヨハネ福音書は 20 章 9 節以下に記載がありますが、旧約聖書のどの部分に復活が語られ、その御言葉が成就した、とはっきり語る記述にはなっていません。

マタイ福音書では、28 章 6 節で翌日様子を見に行った婦人たちに、天使が「かねて言われていたように復活なさった」、急いで行って「あの方は死者の中から復活された。そしてあなた方より先にガリラヤに行かれる」と言わせ、9 節で復活のイエスに出会います。ここでは旧約聖書の箇所を示していません。

マルコ福音書は、4 福音書の中で最初に書かれた福音書です。16 章に復活の記事があります。そこでは墓の中で若者が「驚くことはない。あなた方は十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさってここにはおられない」。そして、皆に「あの方はあなた方より先にガリラヤに行かれる」と告げさせたのです。婦人たちは驚いて逃げ去り、恐ろしくて復活の事実を誰にも告げなかったと言って福音書は終わります。そして、復活後のイエスの行動は附則として追加されています。

パウロが語る十字架と復活 ・ペトロの説教

パウロの書簡には復活の事にふれていますが、旧約聖書の具体的な記述はありません。

パウロはコリントの信徒への手紙一 15 章に具体的にキリストの十字架上の死と復活について書いています。3 節に「最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。」と言ってキリストの受難と復活を語ります。キリストの死と復活は紀元 30 年代で、その事実は口頭伝承されます。パウロは 50 年代に殉教していますが、新約聖書の編纂は、紀元 60 年代後半に最初にパウロの書簡が纏められます。福音書はそのあとに纏められています。コリント書に戻り、パウロは、「キリストが聖書に書いてある通り」と復唱しながら、「わたしたちの罪を負って死んだこと、葬られたこと、三日目に復活したこと、ケファに現れ・・・最後に月足らずで生まれたパウロ自身に顕現した」と言います。

ここでいう聖書は、旧約聖書に書かれている通りということになります。しかしパウロも旧約聖書のどこに書いているかは言っていません。それは旧約聖書全体から指し示されているという理解から語っているからです。

「人の罪を負った死」については、イザヤ書 53 章の「苦難の僕」の聖句に辿り着きます。5 節に、「彼が刺し貫かれたのは／わたしたちの背きのためであり／彼が打ち砕かれたのは／わたしたちの咎のためであった」。7 節には、「苦役を課せられて、かがみ込み／彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように／毛を切る者の前に物を言わない羊のように／彼は口を開かなかった」。しかしパウロはキリストの受難をこの 53 章であるとは言っていません。また三日の後に甦ったことについても聖書箇所を示していません。

最後に使徒言行録を見ると、使徒言行録 2 章のペトロの説教に復活を示す根拠が出てきます。25 節からのダビデの詩として 28 節まで旧約聖書の引用が出てきます。「わたしはいつも目の前に主を見ていた。主がわたしの右におられるので、私は決して動揺しない。だからわたしの心は楽しみ、舌は喜びたたえる。体も希望のうちに生きるであろう。あなたは、わたしの魂を陰府に捨てておかず、あなたの聖なる者を朽ち果てるままにしておかれない。あなたは、命に至る道をわたしに示し、御前にいるわたしを喜びで満たしてください」。

これは、先に引用した詩編 16 章 8～11 節です。10 節で、「あなたはわたしの魂を陰府に渡すことなくあなたの慈しみに生きる者に墓穴を見させず命の道を教えてください。」と書かれています。キリストの十字架と復活は、弟子たちに強烈な衝撃を与えました。そしてこれを目の前にして聖書を学び始めます。伝統的信仰に立つユダヤ人にとってイザヤ書 53 章の「苦難の僕」と詩編 16 章の「ダビデの詩」は、もちろん知ってはいますが、自分たちは期待し待望しているメシア救い主のことを預言しているとは全く信じることはできませんでした。一方キリストの復活の衝撃に打たれ、変えられた使徒たちは、メシアと結びつくとは思っていなかったこれらの聖書が、主イエスの十字架と復活そのものを証していることに気づかされ、こういう旧約聖書箇所こそその根拠となる御言葉であることに辿り着きました。



キリストの十字架と復活が示すもの

初めてのキリスト者は、圧倒的なキリスト復活の事実の前に新しくされました。教会は、クリスマス伝承から始まったのではなく、復活伝承から始まったのです。単にキリストの復活がどこどこでの聖書箇所の成就であるとの見方ではなく、復活されたキリストは、地上に父なる神に遣わされ、人間の罪を贖うために十字架に架かって死に、そしてそこから甦ってくださった。この出来事の中に神の決定的救済の出来事が示されています。

パウロ書簡特にロマ書 4 章、I コリント 15 章に典型的に示されているキリストの復活の出来事はこの世界の歴史の中に、神がキリストをお遣わしになり終末論的な救済の出来事が示されていることがわかりました。世界の歴史が全くキリストの出来事によって一変させられたのです。そのことをパウロは自覚させられたゆえに、大胆に世界宣教(異邦人伝道)の使命が与えられ、その働きを担ったのです。

キリストを信じるか信じないかは、ともすると個人的な信仰や信条の枠の中の事柄のように考えがちですが、聖書の復活信仰は、決してそのような枠の中に納められる事柄ではありません。世界の存在とその歴史の意義がキリストの死と復活の出来事によって新しく意義づけられている、普遍的終末論的出来事に他なりません。〈文責：玉澤武之〉

記録：玉澤武之 写真：滝藤正廣 編集：荻原雄二